Eld: Koi Mukai
1-1307, 1-6, Asahimachi, ABENO, OSAKA
27, Sep. '88 No. 321
イオン通信
大阪市あべの区九阪町1-6, 1-1307
Tel 06-647-4089 向井 孝

ルデーをチャンスとして

▼19日深夜から20日早朝にかけて、同じことを10分おきにくりかえすテレビのアナウンサーが、黒いスーツをきていた。他のチャンネルを廻すと、そこも。二〜三日、いつのまにか、ネクタイ丈がシマ白黒の喪服用に、平服にかえったところが沢山、数が37度いくらになったとたん、又もとの黒服。女性キャスターは黒のワンピース。それにしても準備万端ととのって今か今かと待っその空直さに感心したり、あきれたり。

▼20日21日と、あちこちから6〜7回電話があった。新聞社からは毎日?と共同。「どうされますか」というようなこと。

▼そんなこと答えようもないのだが、一応ぼく個人としての「一般的」なことでいうと—

① 新聞配達—4月頃富さんからもらった「号外新聞」を外出のたびに5部10部携行して、戸毎の郵便受け、公衆電話の中など、所かまわず、入れたり放置したり、を25日から開始した。

(もしこの新聞配達の助っ人してくれる方は、電話で申込みを。06-(ゆ)ゆ八九)

② 電話作戦—テレビ各局へ、「同じことの繰り返しニュースにうんざり」「オリンピック番組もっとふやせ」「お笑い番組とばしたのはなぜ」「宮内庁のビミツ主義事大主義を今こそ打破れ」などウラへ

ふう子さん病状のこと。 9月13日(火)12時10分まえ、手術室にはこばれたふう子さんは、夕刻の六時すぎに、胃の大半をとって、戻ってきた。(生長はの後の)口もとに耳をよせると、「オイチャン」「イタイ」「オイチャン」「イタイ」とゆっくりかすかに呟くだけ…。 ▼そのすこし前に出てきた執刀医が、処置室にぼくを呼び込んで。臍盆の中の「ホルモン」そのものといった肉塊をひろげて示しながら、「手術は心配されたゼンソクのトラブルもなく、順調にすんだ。肉眼による所見として、初期ガンの段階をすこし進行しているが、他の部位への転移は見られない」…ぼくは「うわァーこんなもんをとられたんか!」と、その切りとられた肉片の迫力によろけんばかり、(ふとそのとき「ベニスの商人」をおもいうべたのをいまも覚えている) ▼そのぼくが出てくるのを待ってかけよった太田くんさかえさん江下さんが「どうやった!」ときくのに、ぼくは何ともいえぬ変な顔をしてみせたらしい。話をきいて江下さんが「あ、よかったァー」と深いためいきと一しょにその場に坐りこまんばかりの安堵のすがた。それでやっと「転移がなくてよかったレというおもいがすこしずつ湧き上ってきた。

▼翌日(15日)朝6時〜夕方9時(病院は付添一切不要というにかゝわらず)ローテーションを組んで、松下さん江下さん、井川さんあゆみちゃん国井さん、青ちゃん、鈴さん(そしてぼく)で付添った。一番つらく苦しかったとき(ぼくも)ふう子さんもどんなに助けられはげまされたか。 ▼18日、もう「重病人」やないと、ふう子さん(ぼくに)「準重病人宣言」して、ねまきをパジャマに替えて気分一新。

▼20日、水200グラムをはじめてのむ。ほんのサジ1杯の水がノドで急に石塊のような固まりとなり、一日かゝって100g ▼21日、おもゆ茶碗半杯。(なんやこれ「軽ゆ」やんか、とへらず口) ▼22日 おもゆ、茶碗むし(ぼくが一口たべてみたら味もそっけもなし。勿論、実なし。それがとてもおいしかったと ほんまにうれしそう) ▼23日 三分がゆ。とうふ(献立みるみる変化。ほんまにこんなんたべてエエンかいな、と云いながら、ゆっくりゆっくり一時間半ぐらいかけて) ▼24日、抜糸。傷口はときくと、フランケンシュタインや。腹腹に穴をあけて差し込んである二本の管も抜く。医師「至急順流也」と。熱6度8〜7度4(一年前から今づいている)は、手術熱でなく喘息のせい? ▼25日いよいよ元気。

十二分にうかがえる存在価値

——深く重たい「コスモス」誌百号

詩誌「コスモス」の通巻百号がこのほど刊行された。同人誌であり、九十一ページの小冊子に近いものだが、八発行・一九八八年八月十五日、編集人・秋山清〈と記されたこの詩誌の中身は深く、重たい。

「コスモス」の創刊は敗戦間もない四六年四月。秋山清、金子光晴、小野十三郎、岡本潤の四氏が編集責任者で、いわゆる八人民的詩精神〉を標ぼう、戦後詩誌の草分け的存在だった。その後断続的に刊行を繰り返し、七一年五月からの第四次「コスモス」が現在まで続いて通巻百号。その間、安東次男、菅原克己、田木繁氏ら多くの詩人が参加したが、「荒地」「列島」などの戦後詩誌に比べると、いわば忘れられた傾向にあった。

記念号では関根弘、長谷川龍生、向井孝氏らが百号によせる想いを小文として記している。三十五号にわたる創刊以来の総目次には、常に社会とのかかわりの中に詩精神を見いだしてきた誌の存在価値が十二分にうかがえ、木原実氏のエッセーが述べているように「私たちにたえず入あるべき戦後〉を考えさせ」、さらに権力に対する抵抗と不従順の精神が強く浮かび上がってくる。

誌上からにじみ出てくるのは「コスモス」にかける秋山氏の"執念"。現在、寒質的編集に携わっている菅尾淳氏によると、秋山氏はいつも「コスモス百号」にこだわり、筆を絶った八四年以降も「いきなり百号を出して、逆に戻ってくるのはどうか」としばしば提案していたという。「おそらく百号は自分の追悼号のつもりだったのだろうか」と菅尾氏。いま秋山氏は東京都下の病床で療養中だ。

毎日新聞 8/24

日本のマスコミの異常な天皇病気報道に

1一面よりつづく1毎日、三回以上。（これおうちさんが病院にいてもできると提案）実施中。

③ 反弾圧宣言！『ヒロヒトの死前殺と関連して弾圧にさらされる人が予想される。そのときは何をおいても、私は内心の躊躇をふりきって）はっきりその人の側に立つと宣言する・何もやれない以上私は自分にできる最低のこととして、被弾圧者を救援するために働く。同じ考えのくと連絡をとり、ネットワークを「大阪「うねりの会」06-633-1016の一員として」つくりたい。」

27日「うねりの会」緊急集会にその模様を報告したい。

読売 9/4

英大衆紙が〝宣戦布告〟

「日本、デイリー・スターに宣戦布告」（左）「ジャップ、サンを殴り返す」（右）と大見出しを掲げる英大衆紙（AP）

【ロンドン二十三日＝山口（臨）特派員】二十三日付の英保守系大衆紙「サン」と「デイリー・スター」は、天皇に関する両紙の報道（二十一日付）に対して三十一日に在英日本大使館が手渡した抗議文の全文コピーを掲載するとともに、「ジャップ、サンを殴り返す」（サン紙）、「日本、デイリー・スターに宣戦布告」（デイリー・スター紙）との大見出しを掲げ、日本側の抗議に正面から立ち向かう記事を掲載した。

一方、左派系の大衆紙デイリー・ミラーは二十三日付の社説で、保守系両紙の報道は「恥ずべきもの」と非難。また、他の英各紙は、天皇のご病状悪化を含め、事実関係を客観的に報道しながら、「英大衆紙の報道は、他の国なら見過ごされたかもしれない。日本人は、外国人にどう見られるかを異常に気にする」（タイムズ紙）と、英大衆紙をすると同時に、暗に日本に対しても冷静な対応を促して、タイムズ、インディペンデントなどの高級紙と、両紙のような大衆紙には、大きな格差があり、大衆紙は、時折〝デッチ上げ〟もまじるセンセーショナルな記事や女性のヌード写真などを掲載し、読み捨てにされるのが普通。

サンとデイリー・スターは合わせて約五百万部の発行部数があり、これは英全人口の一割近くに相当するが、その読者の何％が、記事内容に賛同しているかは疑問だ。しかし、言論の自由の長い伝統がある英国では、ごく一部の意見を反映した記事も、英国防機密に触れない限り、掲載を止めることは不可能に近い。

エドワード・ヒース元英首相も二十一日、千葉一夫在英日本大使との雑談の中で「英大衆紙は〝するのが一番だ〟」と語った。

「天皇陛下ご容体報道」外務省抗議 ~~反発~~

貧定

図肉っている

放任

で 海外でも恥の上塗り！

北国新聞記者

「石川県警が情報強要」

だけ

してるのではない

9/22 朝日

社の対応に不満、退社

→ する記者がめったにないだけ！ 御用心ご用心

北国新聞社（本社・金沢市）の社会部記者が「石川県警の刑事中の昨年四月、同じ刑事から同大学文学部口誤への説明について聞かれて以来、情報提供を強要され続けたという。このことを知った同口誤を七月上旬、同社と県警に抗議していた。

北国新聞社の記者は、金沢大学文学部四年生時の昨年四月、同じ刑事から同大学文学部口誤への説明について聞かれて以来、情報提供を強要され続けたという。このことを知った同口誤を七月上旬、同社と県警に抗議していた。

ことし四月に大学を卒業し、社会部に配属された入社三年目の記者（二三）で、A刑事から呼び出しがあった。A刑事は、警官殺、下犯人にB刑事から呼び出しがあった。A刑事は、ほとんど毎日のように、文学部の研究室などに電話をかけ、その他の食事代などは相手が払った。入社後の今年六月十一日、石川県内で民間人グループの会合があり、逮捕者一人が出る事件があったが、その前日、B刑事から呼び出され、警察官について聴かれたあと、B刑事が新聞のカラーテレビ（六万円相当）を下宿の玄関先に置いていったという。

「つつぐち強要されたが、情報を流したことはない。テレビは刑事のプレゼントを受け取ってなった以上、社は言論機関として黙殺してはいけない、と思う。日本の記者代表会議が情報提供を期待して接触してきた事実について、社として厳正に対し厳重に抗議してもらわねば、正方法と記者活動を続けられない」と話している。

接触の有無言えぬ

小宮孝峰・石川県警公安課長の話　B刑事の存在やA氏者への接触の有無については、コメントを控える。警察官職務、発令日の平件は多の本庁から受けた。

あくまで社内問題

黒沢孝・北国新聞社編集局次長兼社会部長の話　A君は務台局次長兼社会部長は「八月上旬、口頭で厳重に抗議した」と話しているが、応対した藤井正・報部は「事実関係を説明しただけで、抗議とは受けとめていない」といっている。

北国新聞社の高橋・編集局次長兼社会部長は「八月初旬、警官殺、下犯人にB刑事から呼び出しがあった。A君は務台局次長兼社会部長の話　A君は務台局次長兼社会部長の話　A君が自ら辞めたとは残念だと思っている。この事件は多くは社内問題だ。

おとずれさま

9月26日記

☆ 貼りつけ記事の印刷で申わけない。☆ ひろえさんへの見舞・それこそ全国から受けて・本く泣いたり笑ったり、ほんまにありがたいとしか云いようありません。☆ おれや術後の報告が一々出ぜず、このイタムで代用という非礼・どうか事情おくみとりの上・おゆるしを。☆ 10月5日 癌研究所分会・工の会講演会ぜひ！ ▼「煙突の色は何色か」山田清次郎史さん来る。（ひろ5）

原発を考えるつどい

原発について考えようと開かれた映画と講演の集い＝尼崎市昭和通2丁目の市中小企業センターで

水田さんは『原発のPR』は安全性が過度されると次は火力発電に比べると原発が安い、と宣伝。安さが崩れそうになると科学技術向上のために必要なんだ、と移り変わってきた。このPR費は本当の安全性向上の研究費よりもはるかに巨額で、本末転倒の状態」と、原発の推進キャンペーンを批判。「一人ひとりが身の回りのことで『原発はいらない』と声を上げていくことが大切だ」と、電気料金の支払い方法を変えることからの取り組みを語った。